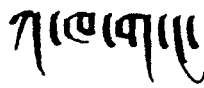


図 11 行書体の例

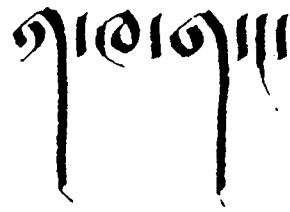
a) スグリン



b) スクトウン



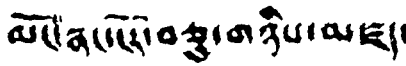
c) ドウツァ



d) ザブディー



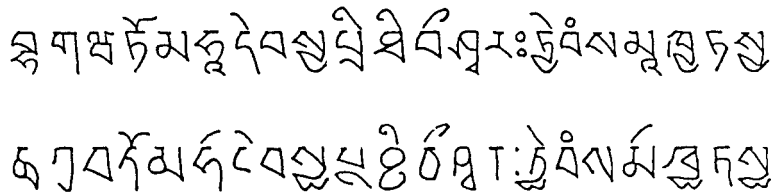
e) バルディー



f) シャルマ



図 12 チベット文字(上)とグプタ文字(下)の見本



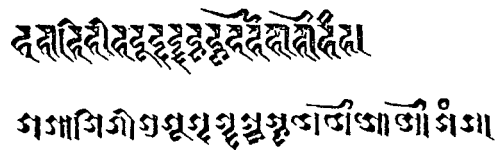
ナルキー (N. Narkyid) がチベット文字有頭体の範としているグプタ文字にもいくつかのヴァリエーションがあり、有頭体の字形がそれらに酷似しているわけでもない。また、字のくずし方についていうなら、くずし方の教科書があるくらいであるから説得力がないではないが、行書体から草書体へのくずし方はともかく、楷書体から行書体へのそれには一定の法則があるわけではなく、かなり恣意的な説明のように思われる。

楷書体、行書体ともに敦煌文献に出現しており、両書体がチベットで書体として確立するのは敦煌期以降 11 世紀のことであるのだから、ランツァ文字とワルトゥ文字を直接の原型とすること自体は誤りであるにしても、もともと 2 系統の原型があったと考えることは論理的には成り立つ。とくに、楷書体と行書体では 1 筆目の筆の入り方の角度が決定的に異なるので、伝統的な解釈にもある種の合理性を認めざるをえない。いずれにせよ、この問題は新しい資料の出現まで解決を見ることはないであろう。

【参考文献】

Bu ston rin chen grub (1729-33), *bDe bar gshegs pa'i gsal byed chos kyi 'byung gnas gsung rab rin po che'i mdzod*, sDe dge edition, 203 fols. (デルゲ

図 13 ランツァ文字(上)とワルトゥ文字(下)の見本



〔徳格〕(SRD)

Bacot, J., F. W. Thomas & Ch. Toussaint (1940), *Documents de Touen-houang relatifs à histoire du Tibet* (Paris) [DTH]

Bühler, Georg (1980), *Indian Paleography* (Oriental Books Reprint, Delhi)

Narkyid, Ngawangthondup (1983), "The origin of the Tibetan script", in E. Steinkellner & H. Tauscher (eds.), *Contributions on Tibetan Language, History and Culture* (Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien, Universität Wien, Wien)

西田龍雄 (1987), 「チベット語の変遷と文字」『チベッ